

OPINION オピニオン・スライス SLICE

すべてのこどもに
こども時間を

特定非営利活動法人 日本クリクラウン協会理事長/
小児科医・大阪府立母子保健総合医療センター顧問

河 敬世 さん

— 「クリクラウン」とは、どのような活動ですか

クリニック、病院を訪問するクラウン（道化師）です。クリクラウンが入院生活を送る子どもたちの病室を訪問し、遊びや会話を通じて子どもたちの成長を支援するという活動です。赤鼻をつけたクリクラウンが陽気な姿で病棟に現れると、パッと明るく楽しい空気が流れ、一気に和やかなムードになっていきます。

— 病院でクラウンに出会うと、子どもは変わりますか

子どもの患者さんは、入院中は決められたことを淡々としています。やらなきゃあないからです。検査も痛い、治療もそうでしょう。入院中は規則に縛られて、皆いい子になっているわけです。ところが、クリクラウンとの関わりでは、逆らったり、いたずらしたり、子どもが普段やっているようなことをやってみせるわけです。それで子どもらしさがだんだんと戻ってくるんですよね。

大人びて、表情がなかなか変わらないお子さんたちも多くなります。そういう子どもたちが、クリクラウンが行くと、「何か来た」とちょっとびっくりした顔をしたり、「何するの」という気持ちを出したり、わくわくしている表情や「えーっ」と驚いた表情をするんです。自分の今の気持ちを自然に表せるきっかけをつくる。そんな役割もクリクラウンは担っていると思います。

— 活動の基本的な考え方は何でしょうか

「チルドレン・ファースト」です。社会のどこにしようが、子どもが一番大切に扱われない社会は絶対だめなんじゃないかな。



今、悲惨な事件が起こっていて、このまま行くと日本の社会はどうなるか分からない。原点に戻って子どもをまず大事にする。病院という環境に閉じ込められている子どもたちには、子どもらしさを引き出してあげるのが非常に大事だと思います。教育環境も問題がありますが、療養環境も、制約があり過ぎる。そこに、赤鼻をつけている人を見るだけで子どもの顔色はぽっと変わる。心がわくわくするような機会が増えると、治癒過程にもいい影響を与えるはずだと思います。「子どもらしさ」を担保できる療養生活を保障するため、クリクラウンや保育士、ボランティアの方がたくさん病院に入るようになりました。様変わりしましたね。

— 「クリクラウン」が始まったきっかけは

オランダ総領事館に勤めていた当協会の理事でもあるヨルンさんが仕掛け人でした。彼のオランダ人の友人のお子さんが日本で入院したので、見舞いに行ったら、その友人が、オランダでは小児科病棟に「クリクラウン」が定期的に来てくれるのに日本では来ないと言う。調べたら、日本には全くいないということが分かり、必要だろうということで、オランダ総領事館がオランダのクリクラウンを日本へ招いてくれたんです。

そのとき、僕の勤務病院であった和泉市の大阪府立母子保健総合医療センターと名古屋の第一赤十字病院にオランダのクリクラウンが訪問してくれました。その時に脳腫瘍で入院していた10歳ぐらいの女の子は病気のせいで言葉がしゃべれない状態が半年ぐらい続いていて、言語訓練をしても全く発語しない。オランダのクリクラウンは言葉は通じませんが、仕草とかでその子とすっきり打ち解けたんです。でも、次の予定があるから15分ぐらいで病室を出ないといけない。そのときにお母さんが「ありがとうと言おうね」と言ったら、「ありがとう」と言ったんですよ。半年間、一言もしゃべれなかったのにね。これはえらいことやと。

それで、当時、個人的に活動されていた道化師の方や医師や看護師やがんの子どもを守る会の人たちが、日本でも必要ということでNPO法人を立ち上げたわけです。クリクラウンを

養成し、2005年11月から僕の勤務病院で研修していただいて…それがスタートです。

— 「えらいこと」を目の当たりする以前から必要と覚えておられたのですか

いや、全く。病院の療養環境を改善しないといけないという思いはありましたが、「クリニクラウン」は全く知らなかったですね。

— 現在活動されているクリニクラウンさんは何名ですか

認定クリニクラウンは18名で、昨年は日本全国33病院を260回訪問しました。医療現場での活動ですので、選考会を行い慎重に選抜しています。より適性のある方を選抜して、およそ1年間の養成トレーニングを行っています。人を育てるのは時間と人とお金が必要です。財政的な基盤が弱い部分もあり、現在は少人数を育成していく形ですが、多くの入院中の子どもたちのところにクリニクラウンが訪問できるように、重点課題として取り組んでいます。

— NPO運営について一番気になるのは、どうやって財政を安定させているのかという点です

当初は助成金と、クリニクラウンオランダ財団のスタイルにならない、寄附で全て賄おうとしました。初めは訪問病院数も少なく何とかなったんですが、訪問希望の病院が増える一方で、リーマンショックなど社会情勢の変化で、寄附が激減した時期がありました。ちょうど2008年ごろに、今の寄附金の推移では派遣日数のめどが立たなくなり、病院に事情を説明することが決まりました。

最近では、派遣費用の一部を予算化してくれる病院が随分増えてきました。1度訪問すると、また来てほしいと思っていただける。「信用と実績」が10年で少しずつついたのかなと。まだまだ順風満帆ではないですが、多くの人に寄附をいただき、応援の声を力に、少しずつ前に進んでいけていると思います。活動を継続していくために、いかに財政基盤を安定させていくかが今後の大きな課題です。

— 10周年を迎えられるそうですが、今後の展開は

設立して10周年を迎える特別な年なので、記念事業としてタイや韓国への親善訪問、オランダへの視察研修や10周年活動報告会などを計画しています。10年間の活動を振り返るとともに、さらなる飛躍を目指していきたいと思っています。

— 団体としては、小児以外にまでは広げないんですか

長期入院をしている小児がんの子どもたちの病室への訪問からスタートしましたが、活動を続けていく中で、様々な病気の子どもたちと関わるようになりました。心臓疾患のお子さんもいれば呼吸器をつけていて、自分の意思では発言ができない、体を動かすことができないといったお子さんにもクリニクラウンは会います。最近ではNICU（新生児集中治療室）やPICU（小児集中治療室）からの希望もあり、年齢や疾患にとらわれることなく「闘病している子どもたち」を支援するというスタンスです。

— 新生児にも効果があるのですか？



保育器に入っている新生児や未熟児にも、クリニクラウン訪問の効果があるんですよ。家族やスタッフが癒されるんです。緊張感の高い医療現場なのにクリニクラウンが来ると雰囲気はやわらぎ、お母さんの笑っている声を子どもたちに聞いてもらうのはすごく大事だと思います。ご家族の表情もがらっと変わります。

— 苦労される点は

現場のクリニクラウンから「かかわったお父さんが旅立ったとき、何ができたのかなと思うし、何とも言えない寂しい気持ちになる。でも、思い出すのは、その子の笑顔や楽しい思い出。闘病生活を過ごす子どもたちから、自分だけじゃなく一緒に頑張っている子どもたちみんなに笑顔を届けてほしいという気持ちを伝えてくれたこともある。そんな気持ちに応えられるように頑張りたい。」という話を聞きました。活動を継続していくということは、大変な部分も多いです。でも、来てほしいという声がある限りは続けていくことが大事です。喜ぶ子どもたち、家族の姿を見て勇気づけられて、それが継続の力になっています。しかし、やっぱり行き詰まることもあるんですね。それはどの職業でもそうだと思うんですよ。一生懸命やっているんだけど悩む時期があるんですね。ちょうど10周年で、そういう時期を迎えているんだと思います。組織としても、クリニクラウンとしても、次のステージに行くためには何が必要なのか模索している状況です。

10年前にスタートしたクリニクラウン活動が日本であたりまえになるように、入院中の子どもたちのことやクリニクラウンの活動に多くの人に関心をもってもらい、継続的に活動ができるように、力を貸してもらえたらと思います。

— 最後に、弁護士・弁護士会に向けて一言

今回、大阪弁護士会からの取材ということで意外だったんです。医者の世界もそうですが、弁護士の世界も自分たちだけのクローズドで、ほかの領域との交流が少ないという共通項があると思っていました。だけど、こういう形で来られるようになったんだと。うれしいですね。

私たちの活動は入院中の子どもたちの人権擁護の活動でもあります。子どもの人権からの視点を含めた、法律の視点から客観的に教えていただくということも必要なのかなと。あとは、組織として大きくなっていく上では、法律的なこともきっちりと、社会に発信をしていかなければいけないですね。

(Interviewer：三木秀夫／Photo：武田真実)

※活動中の写真は、日本クリニクラウン協会からご提供いただきました。